

なぜ人は田舎暮らしを目指すのか？

(上)

田園の歓喜と憂鬱

ルポライター

宗像 充

●むなかた・みつる 1975年生まれ。登山や環境、家族などをテーマに執筆。著書に『ニホンオオカミは消えたか?』『南アルプスの未来にリニアはいらない』など。

「南信州移住フェア開催」――。

新宿発長野県飯田市行き的高速バスに乗って、前の席の背面の網ポケットを見ると、そんなチラシが入っていた。都内で行われる自治体合同のフェアには、今ぼくが暮らしている村の名前もあった。

歓迎されない移住者？

ぼくは現在、長野県大鹿村^{おおしか}という人口千人ほどの村で暮らしている。取材で訪れた大鹿村でパートナーと出会い、東京の家を引き払って、彼女の実家とは別の集落の空き家を買って暮らすようになったのが二〇一六年。結婚して村にやってきたから、自分が移住

れたし、隣近所の人たちは余った野菜を持ってきてくれる。虫は多いしネズミの被害に頭を悩ませはするけど、山懐に囲まれた環境はいい。草刈りや何やかやと昔ながらの自治会の行事はあるが、出ている限りは他の住民と同様に扱ってくれる。

考えてみれば自分自身も九州の田舎出身で、進学で東京に出ていった者の一人だ。それにぼくの両親も、その土地では新参者だったので、地区の人との付き合いに気を遣う親の姿も見えてきた。

注目されているのでいろいろ噂になったにしても、こんなものだろうと思っても日々を送っている。ただ、父たちのころはそれを「移住」とは呼んだりしなかった。「移住」という言葉には、以前とは違う現代的な意味が込められている。

村で暮らすようになって、村のNPOと村がいつしよに移住促進のツアーをしているのを知ったし、移住者向けの交流イベントがあったことも知った。ところが「最新の」移住者であるぼくにはちっとも声がかからない。東京で市民運動の経験もあって、村の中でも村政に批判的な発言をしたりしたから、行政から煙たがられるのは苦にはならない。でも、ここでは歓迎さ

者だという自覚はあまりなかった。だから大鹿村も含めた地域の自治体が、移住を積極的にアピールしているのにはちよつと違和感があった。

というのも、村役場で村の空き家バンクを紹介してもらったが、その後、役場から移住者として何か厚遇された記憶もないからだ。役場のカウンターで職員に質問するたびに、「この村ではこういうやり方をしてるので」という答えを聞く経験が何回もあったので、とても村役場が新住民を歓迎しているとも思えなかった。「イヤならよそに行け」とも聞こえてしまうし、実際そう指摘すると否定しない職員もいた。

だからといって、村での暮らしが難しいかといえばそうでもない。所属する自治会の班は歓迎会をしてく

れる移住者と、そうじゃない移住者がいるというのはわかった。

「うちの村に来てください」「ぜひ、うちの村への移住を」という掛け声自体にムラムラと疑問が湧いてきた。

何しろ大鹿村に限らず、近隣の自治体の役場のカウンターには移住関係のチラシが年々増えていく。移住専門の部局を設けている自治体も長野県内ではもはや珍しくない。

国も「地方創生」という掛け声のもと自治体への予算措置をし、その一部が移住施策に流入しているようだ。しかし、「生き残り」をかけて地方創生の競争をしなければならぬというのは、いったい地域のためなのだろうか。大鹿村でも、定住が目的の「地域おこし協力隊」隊員が、任期の三年を終えると村を出て行ってしまつケースは少なくない（地域おこし協力隊とは臨時職員の公務員扱いで給料は国が出す。地域おこしと定住のための総務省の制度）。

しかも東京圏への人の集中にブレーキがかかっているわけでもない。矛盾があるのではないか。